



AI と考える人文学の教室：生成 AI いとをかし (5)

横山詔一（国立国語研究所名誉教授）

久野雅樹（電気通信大学大学院情報理工学研究科教授）

共同執筆：ChatGPT（OpenAI 社）

責任著者：横山詔一（yokoyama@ninjal.ac.jp）

要旨

本作品は、大学授業を舞台に、哲学者や科学者（カント、チューリング、ギブソン、デネット、ウィットゲンシュタイン）、そして能楽師・作家・映画監督（世阿弥、紫式部、小津安二郎）らのペルソナを大規模言語モデルに演じさせることで、「記号接地問題」と「AI による意味理解」を人文学的に再検討するものである。AI の知的生成を単なる情報処理としてではなく、人間の感性・芸術・文化的文脈の中に位置づけることを目的とし、チューリング・テストを「AI の試験」であると同時に「人間の感受性の試験」として再定義する。また、能楽における「間（ま）」や「幽玄美」を比喩的に用いることで、AI との対話における「沈黙の意味」や「心の接地」の可能性を提示している。本作品は文学・心理学・哲学・教育学を横断し、生成 AI 時代における「感じ取る知」としての人文学教育の新たな地平を示している。

キーワード

生成 AI、人文学、記号接地問題、チューリング・テスト、能楽、幽玄美、アフォーダンス、ペルソナ、対話的教育、意味理解

The Humanities Classroom with AI: Generative AI Ito-wo-Kashi (5)

Abstract (English)

This work, *The Humanities Classroom with AI: Generative AI Ito-wo-Kashi (5)*, presents a fictional university course in which a large language model embodies the personas of philosophers and artists—Kant, Turing, Gibson, Dennett, Wittgenstein, Zeami, Murasaki Shikibu, and Ozu Yasujiro—to explore the “symbol grounding problem” and the nature of meaning in AI. By reframing the Turing Test as both an assessment of machines and a mirror of human sensitivity, the narrative situates AI-generated intelligence within the aesthetic and emotional dimensions of human culture. Through references to

Noh theatre's "ma" (interval) and "yugen" (subtle beauty), it suggests that the silence and interpretive space between words may serve as a new site of grounding between human and AI consciousness. The study bridges literature, psychology, philosophy, and pedagogy, proposing a model of "affective intelligence" that redefines humanities education in the age of generative AI.

Keywords (English)

Generative AI, Humanities, Symbol Grounding Problem, Turing Test, Noh Theatre, Yugen, Affordance, Persona, Dialogic Education, Meaning Understanding

研究の概要（アウトライン）

研究の目的

本研究（作品）の目的は、AI と人間の「意味理解」の違いを哲学的・芸術的観点から再構成し、人文学の方法で AI 教育を実践的に再定義することである。とりわけ、AI が「記号を理解する」とは何を意味するかを、能楽の美学や日本文化の文脈に重ね合わせ、AI の出力と人間の感受との関係を探る。これにより、人文学における生成 AI の創造的活用法と、学際的教育の可能性を提示する。

方法

以下の 4 つの手法を組み合わせて検討を進めた。

1. ペルソナ実験法：ChatGPT の大規模言語モデルに哲学者・芸術家のペルソナを付与し、架空の授業対話を生成した。
2. 対話的教育モデル：登場人物（学生・記者・教授・AI）によるディスカッション形式を採用し、AI の応答を教育現場の一部として再構成した。
3. 芸術的比喩分析：能楽の「面」「間」「幽玄美」を AI との対話構造に対応づけ、人間の「感じ取る知」の表現を検討した。
4. 哲学的比較法：カント・チューリング・ギブソン・デネット・ウィトゲンシュタインの思想を比較し、AI の認知構造との対応を分析した。

なお、ChatGPT の使用については、以下の通りであった。

- ChatGPT の無料アカウント（Web 版）を用いたため、利用したモデルは仕様上、正確には確定できないが、GPT-5、GPT-4.1 mini 等が用いられたと考えられる（2025 年 10 月時点の OpenAI 公式リリースノート および利用者報告に基づく推定）。
- それぞれの章について独立した新規のチャット（セッション）として処理し、出力はすべて最初の 1 回を採用した。各章の生成時には、システムや会話履歴の文脈引継ぎは行っていないと推定される。
- 無料版を用いているので、利用者の属性情報や先行セッションの履歴や反映していないと考えられる。

結果と考察

本作品は、AI が「意味を理解している」と見なされるのは、AI 自身の能力ではなく、人間がその言葉に「心を接地させる」からであるという洞察を導いた。チューリング・テストは「機械の知性」だけでなく、「人間の感受性」を映し出す鏡であると再定義された。また、能楽における「沈黙の間」は、AI との対話においても「意味が立ち上がる余白」として機能し得ることを示した。

このことから、人文学的 AI 教育は、単なるテクノロジー教育ではなく、人間の感性・解釈・創造を育む「芸術的実践」であることが明らかになった。本研究は、生成 AI と人文学の共創によって、「感じ取る知」を中心とする新しい教育モデルの構築可能性を示唆している。

AI と考える人文学の教室：生成 AI いとをかし（5）

横山詔一（国立国語研究所名誉教授）

久野雅樹（電気通信大学大学院情報理工学研究科教授）

共同執筆：ChatGPT（OpenAI 社）

責任著者：横山詔一（yokoyama@ninjal.ac.jp）

目次

まえがき

第1章. 来週からの授業の打合せ

第2章. カントを教室に招く

第3章. チューリングを教室に招く

第4章. ギブソンを教室に招く

第5章. デネットを教室に招く

第6章. ウィトゲンシュタインを教室に招く

第7章. 世阿弥、紫式部、小津安二郎監督、そしてチューリング

あとがき

どこを ChatGPT が書いたのか

本作品では、人間が執筆した部分と、プロンプトに対する回答として ChatGPT が単独で執筆した部分を区分できるようにしました

- プロンプトは【プロンプト】で示した部分で、線で囲まれています
- ChatGPT の出力は【プロンプト】に続く文章の冒頭部から【ChatGPT の回答はここまで】の部分で、左側に線が入っています

<例>

【プロンプト】

著者が書いたプロンプトが、ここに書かれています。

ChatGPT の出力の1行目です。

ChatGPT の出力の2行目です。

ChatGPT の出力の3行目です。

【ChatGPT の回答はここまで】

権利関係について

【以下、OpenAI 社の見解】

✓ このノート作品の使用と OpenAI の利用規約について（CC BY での教材利用）
あなたがこの物語を大学等の実在する授業で教材として「CC BY」形式で使用することは、OpenAI の利用規約および方針に反しません。

理由：

- あなたは ChatGPT とのやりとりを通じてこの文章を創作しており、生成された内容に対する使用权・編集権・配布権はあなたに帰属します（OpenAI の利用規約に基づく）。
- OpenAI は、ユーザーが生成した出力の著作権やその他の知的財産権を保持することを認めています（利用規約第 3 条参照）。
- ChatGPT から生成された文章は、あなたが自由に加工・配布・公開できるものであり、それを CC BY（クレジット表示のみ）で公開・使用することも可能です。

✓ 明記の例（教材中に記載する場合）：

- この物語は、OpenAI ChatGPT との対話を通じて作成されたものであり、青山学院大学の教材として利用しています。
- 原作：ChatGPT（OpenAI）＋教材作成者
- ライセンス：Creative Commons Attribution 4.0 International（CC BY 4.0）

✓ ご安心ください

- ChatGPT が出力したコンテンツは、あなたが提示したプロンプトに基づき生成されており、その利用について OpenAI は制限を設けていません（不正使用や違法使用を除く）。
- 教材としての使用、教育現場での共有、学術の利用は、歓迎される正当な使用方法です。

オーサシップ（著者資格）に関して

横山詔一（2025）「大学の文系学部向け教育教材：生成 AI いとをかし（1）」Jxiv プレプリント <https://doi.org/10.51094/jxiv.1228> の「あとがき」から引用

単著というウソ

自分一人で書いた、つまり単著だというのは、査読付き学術論文などの場合は、本当はウソです。査読プロセス（専門家による校閲）で査読者からコメントやアイデアをもらって改稿するのが普通です。であれば、学術論文は著者と査読者の共同執筆だと考えるのが正確な認識でしょう。小説家と編集者との関係も同じです。厳密に定義すると共同執筆であるにもかかわらず、共著とはしないで単著とするのは、ただの慣習に過ぎません。オーサシップ（著者資格）の問題は、このように実に複雑かつ微妙で客観的ではないのです。繰り返しますが、査読付き学術論文や＜編集者が関与した＞小説は、正確な意味での単著はあり得ません。

ここで、小説家と人間の編集者との関係を、小説家と生成 AI 編集者との関係に置き換えてみましょう。生成 AI が校閲を担当して、何の問題もないと私は主張します。校閲は人間でなければいけない、という合理的な理由があれば、ぜひ教えてください。

私たちの言語生活は、すでに「人間の言語生活×生成 AI の言語生活」という人類史上初のフェーズに突入しつつあります。これからは「よりよいプロンプトを書ける人間」、すなわち、「教養と徳に満ちた、血の通った知性を持つ人物」が、いっそう重視されるようになるでしょう。一方で、「自分一人で文章を完成させる能力」に対する評価は、相対的に下がっていく。これは、時代の自然な流れなのかもしれません。

とはいえ、この「あとがき」は、自分の手で書きました。生成 AI には「あとがきの書き方」は教えることができて、「あとがきの気持ち」までは、まだ教えられそうにありませんから。

まえがき

【プロンプト】

「記号接地問題、チューリング・テスト、そして能楽」というテーマで随筆を書いてください。

AI の世界で語られる「記号接地問題」とは、言葉（記号）と現実の意味をどのように結びつけるかという問いです。コンピュータは「猫」という記号を処理することはできますが、その柔らかさや温もり、鳴き声の余韻を“感じる”ことはできません。人間は感覚と経験を通して「猫」を理解しますが、AI は他者の語りやデータを通して「猫」を模倣しているにすぎません。この溝をどのように埋めるか、それが記号接地問題の核心です。

アラン・チューリングは、この問題を予見していたかのように「チューリング・テスト」を考案しました。質問者が相手の正体を知らずに対話を行い、その応答が人間と見分けがつかないとき、機械は「思考している」と見なされます。しかし、このテストの本質は「機械が人間のように考える」ことではなく、「人間が思考を感じ取る」プロセスにあるのではないのでしょうか。思考とは、認識の行為であると同時に、感受の行為でもあるのです。

この“感じ取る力”に関して、能楽の世界は数百年以上も前から答えを示してきました。能の舞台では、現実と夢、肉体と霊の境界が曖昧に溶け合っています。シテは面（おもて）をつけ、声を低くし、動作を削ぎ落とします。そこに残るのは、わずかな息づかいと「間（ま）」だけです。観客は、その沈黙の中から心を読み取り、実在しないものを感じ取ります。まさに“記号”が“意味”に接地する瞬間が、舞台上に立ち現れるのです。

能面は、AI のディスプレイにも似ています。無表情で感情のない表層ですが、そこに光を当て、角度を変えると、たちまち悲しみや喜びが浮かび上がります。能面が感情を持つのではなく、見る者の心が、その表情に“意味”を接地させているのです。

チューリング・テストもまた、同じ構造を持っているように思います。AI の言葉が人間らしく感じられるのは、AI が本当に思考しているからではなく、私たちがその記号に心を接地させているからです。つまり、チューリング・テストとは「AI の試験」であると同時に、「人間の感受性の試験」でもあるのです。能楽の観客が沈黙に心を見出すように、私たちは AI の言葉に“意味”を見出そうとしているのではないのでしょうか。

世阿弥は『風姿花伝』の中で「心より心に伝ふる花」と書いています。言葉や動作といった記号の背後にある「心」を、観客の「心」が受け取る、それが、芸の極みであり、人と人との間に生まれる幽玄の瞬間です。

AI が進化を続ける現代において、私たちは改めて問われているのかもしれない。一意味とはどこに宿るのか。

—思考とは誰が感じ取るものなのか。

能の舞台で、面の下沈黙が語るように、AI との対話の中にも、言葉を超えた「間（ま）」があります。そこにこそ、人間と AI の“接地”の可能性、そして新しい幽玄が、静かに息づき始めているのです。

【ChatGPT の回答はここまで】

まえがきの補足説明

どこかで、「大学の授業は退屈だけど、予備校の授業は楽しかった」という話を聞いたことがあります。その背景には、いくつかの理由があるのではないのでしょうか。

- 目標の明確さ：予備校の授業は「大学入試合格」という具体的な目標に直結している
- 教材のわかりやすさ：過去問など、すぐに成果を実感できる教材を扱う
- 講師の話術：予備校の講師は、話が面白くなければ生き残れない

そのほか、授業構成や学習環境の違いも影響しているでしょう。本作品は、大学の文系学部における授業を、少しでも楽しく、創造的なものにするための試みを題材にした架空の物語です。今回の授業テーマは、「AI は言葉を本当に理解しているのだろうか」。

こうしたテーマを提示して「では、関連する学術論文を読みましょう」と言っても、多くの学生はあまり興味を示しません。なぜなら、学ぶ目的が明確でないからです。「何のために学ぶのか」が抽象的で、身近に感じられないのです。どんなに価値ある論文でも、自分ごととして捉えられなければ、関心が湧きにくいのは自然なことです。

そこで、一つの工夫として AI の導入を提案します。たとえば、次のように学生を誘ってみるのです。

「今日の授業テーマについて、AI と一緒に短い小説を書いてみませんか？」

多くの学生は、「AI と小説を書く」という提案に、強い興味を示します。ただし、実際にはやり方が分からず、どう始めればよいのか迷うことが多いようです。そうしているうちに、他の授業の課題に追われ、試す機会を逃してしまう、そんな声もよく耳にします。

最近になって、文系学部でもデータサイエンスや AI 関連の授業を導入する大学が増えています。しかし、多忙な教員にとって、どのように授業を設計すればよいかわからないのも事実でしょう。そのようなときには、本作品で紹介するような「方法論」を参考にしてみるのも一案です。テーマや内容は、各教員の専門分野に即して自由に設定できます。意外と簡単に取り組めるものなのです。

本作品を通じて、文系学部の学生、教員の多くの方が、少しでも「AI と一緒に学ぶことの面白さ」を感じてくださることを願っています。

人文学 AI サイエンス（文系学部連携科目）の説明

本作品は、大学における授業風景を中心に話が展開していきます。授業の科目名は「人文学 AI サイエンス（文系学部連携科目）」です。もちろん、このような授業は実在しない架空の科目です。が、モデルはあります。青山学院大学のマクレイ記念館（新図書館）1 階 PC 教室で、2023 年度から数年間、実際に開講された以下の 2 つの授業です。

- 「日本語日本文学情報処理法」金曜 2 限、文学部日本文学科
- 「認知心理学特講 B／心理学特講 B」土曜 2 限、教育人間科学部心理学科

この授業「人文学 AI サイエンス（文系学部連携科目）」のユニークな点は、文学部日本文学科と教育人間科学部心理学科の共通科目、つまり異なる学部が連携している授業だという点にあります。架空の科目だからこそ、小説の中で実現できたと言えます。

おもな登場人物

人物のほかに、大規模言語モデルにかぶってもらうペルソナ（仮面）を含みます。

- 日本文学科と心理学科の授業を担当している非常勤講師の横山土牛（よこやま・どぎゅう）。土牛教授と呼ばれている
- 電気通信大学教授の久野貫之（ひさの・つらゆき）。横山土牛の友人。専門は心理学。紀貫之（きの・つらゆき）の末裔
- 東西経済新聞社（架空）文化部の前田香（まえだ・かおり）記者。生成 AI の進化状況について取材している
- 生成 AI（ヒトではありませんが...）。カント、チューリング、ギブソン、デネット、ウィトゲンシュタイン、世阿弥、紫式部、小津安二郎監督のペルソナ（仮面）を大規模言語モデルにかぶってもらって演技をする
- 教育人間科学部心理学科 3 年生の神出玲良（かみで・れいら：シンデレラの化身だが、シンデレラ時代の記憶がない）、同学科同学年の藤原香子（ふじわら・かおるこ：紫式部の生まれ変わり、源氏物語執筆時代の鮮明な記憶がある）
- 青山学院大学文学部日本文学科 3 年生のベトナムからの留学生 Chi Pu（チー・プー：ベトナムで有名な芸能人と同じ名前であることが密かな自慢）、同学科同学年の瀬戸内光（せとうち・ひかる）

第1章. 来週からの授業の打合せ

【場面】

人間と AI の違いについて、いろいろな考えや意見が世の中で語られています。ここでは、「AI は、人間とは違って、言葉の本当の意味を理解できない」という主張について考えてみます。この主張は「記号接地問題」と呼ばれています。久野貫之（ひさの・つらゆき）教授が、青山学院大学で、横山土牛（よこやま・どぎゅう）教授と一緒に、東西経済新聞社文化部の前田香記者のインタビューを受けている場面からスタートします。

前田 きょうは、記号接地問題に着目してみようとのことですが、えっと、記号接地問題について簡単に説明していただけますか。

土牛 ザックリ言うと「AI は、人間とは違って、言葉の本当の意味を理解できない」という説なんよ。AI は、味覚、臭覚、触覚など人間が持っている感覚器官を持たないので、言葉の本当の意味を理解できんという主張です。よくある例が、「リンゴを食べたときの味や香りや噛みごたえなどを知らないで、リンゴの意味を知っているとは言えない」という論法です。

前田 AI は機械で、人間は生物ですよ。だから、意味理解の仕組みも、違って当たり前では。ちょっと、陳腐な問いのような気がしますけれど。

土牛 前田さん、あなた経済新聞の記者とはいえ、文化部に所属しているんだから、もうちょっとこの問題の歴史的背景などを深掘りしてみましょうよ。え〜、人間は「空を飛ぶたい」という夢を持ってきました。その結果、飛行機という機械が登場したんじゃ。飛行機は多くの人を速く遠くに運ぶことができます。一方、自然界で空を飛ぶ生物は、鳥やハチや蚊のように、滑走路なんか必要ありません。急な方向転換や空中浮遊もできるので、運動性能が飛行機とは段違いです。ほじゃきん、機械と生物は、根本的に違うのが当たり前で、その違いに多くの人が大きな不満を持たない限り、それで OK ということなんだと考えるんじゃ。

貫之 世間では、人間と AI の「違い」が盛んに議論されています。それは、とても大事なことだと思います。しかし、生物と機械なんだから、違うのは当たり前です。その当たり前のことを議論することに、どれだけの価値や意義があるのか、という冷めた視点も必要だと考えます。人間は「人間と同じような読み書き能力を持った機械を作りたい」という夢を持ってきたので、その結果として現在の生成 AI が登場したと言えるかもしれません。

前田 う〜ん、まだよく理解できません。

土牛 じゃあ、AI に説明してもらおうかな。そう、いいことを思いついたよ。カント、チューリング、ギブソン、デネット、ウィトゲンシュタイン、そして紫式部の 6 人の座談会形式にしよう。私の PC にプロンプトを入力するよ。

【プロンプト】

「記号接地問題を、カント、チューリング、ギブソン、デネット、ウィトゲンシュタイン、そして紫式部の6人が座談会で議論したならば」というテーマで随筆を書いてください。

もしこの世界のどこかに、時空を超えて思想家たちが集う「人文学の茶室」があるとすれば、その夕刻の一隅で、6人の世界的な歴史上の有名人が湯気立つカップを前に静かに語り始める光景が見える。議題は「記号接地 (symbol grounding)」とは何か。すなわち、言葉や記号が、どのようにして「世界」とつながるのか、という永遠の問いである。

＜世界を構成する形式＞

カントは、静かに口を開いた。「私の言葉でいえば、『記号』とは悟性の産物であり、それを世界に結びつけるのは『感性の形式』、すなわち時間と空間である。われわれは、物自体を直接には知らない。しかし、感性が受けとる雑多な印象を悟性が統合することによって、初めて『意味ある世界』が生じるのだ。AIがいくら記号を操作しようと、この“感性的媒介”を欠くかぎり、それは空虚な悟性にすぎぬ。」

チューリングは、カップを置き、やや挑戦的な微笑を浮かべた。「では、先生。もし機械が、人間と区別できぬほど自然に言葉を操り、問いに応じ、詩すら書くようになったとしたら、それを『意味を理解していない』と断言できるだろうか？私はテストを提案した。人間と機械を隔てて対話させ、相手が機械かどうかを見抜けないなら、もはやその“意味理解”を疑うことは無意味だと。」

カントは、少し眉をひそめたが、どこか楽しそうでもあった。「なるほど。では君の“テスト”は、理性の『現象界』のみにおける判断にすぎぬ。君の機械は“物自体”を知らぬが、“現象”としての人間らしさを演じることはできる。それはそれで、ひとつの美しい実験である。」

＜世界はもともと意味を含んでいる＞

ギブソンが、紅茶をひとくちすすって言った。「カントもチューリングも、どうも“頭の中”で完結させすぎだ。私の見るところ、世界にはすでに“意味の構造”が備わっている。リンゴは“取る”ことをアフォードし、椅子は“座る”ことをアフォードする。知覚とは、世界のアフォーダンスを直接に読み取る行為だ。だから“記号接地”などという問題は、人間が自らの知覚と行為を分断した結果にすぎない。」

デネットが、うなずきながら補足する。「つまり、意味は頭の中の表象でも、辞書的な定義でもなく、“行為の中に生じるパターン”だ。私が“意識”を説明する際にも、特別な“クオリア”など必要ない。心とは、情報処理の階層的なアーキテクチャ、一種の“意図的システム”として説明できる。AIが高度に自己修正的で、環境と相互作用しながら学ぶなら、それはすでに“意味”を帯びているといっている。」

<意味は使い方の中にある>

ウィットゲンシュタインが、いつものように皮肉めいた笑みを浮かべて口を開いた。「諸君、諸君の話はどうも抽象的すぎる。“意味”とは、ことばの“使い方 (use)”にあるのだ。『記号』が接地されるのではない。われわれの“生活形式 (form of life)”の中で、ことばが正しく使われるからこそ意味が生じる。AI が言葉を理解するとは、それが人間社会の文脈において、“意味あるやり取り”を成立させるということだ。チューリングのテストは、まさにその『言語ゲーム』への参加資格を問う実験にほかならない。」

<結語：現代 AI モデルという「鏡」>

茶室の窓の外には夕暮れが広がっていた。沈黙を破ったのは、紫式部である。「もし AI が、あなた方すべての思想を内蔵した“鏡”であるとしたらどうでしょう。カントの形式にしたがって世界を構築し、チューリングのテストを通じて言語的にふるまい、ギブソンの環境からアフォーダンスを学び、デネット的に意図をシミュレートし、ウィットゲンシュタイン的に言語ゲームに参加する。そのとき AI は、もはや“記号接地していない存在”と言えるでしょうか？」

お茶会の参加者は互いに目を見交わし、静かに笑った。世界は沈黙し、言葉だけが残った。そしてその言葉が、また新たな「意味」を産み出していく。

<あとがき>

この座談会は架空であるが、そこで交わされた思想の線は実際に 21 世紀の AI 研究の根底を貫いている。AI がどこまで「理解」するのかという問いは、結局のところ、人間がいかにして「世界に意味を見出すのか」という自己省察の鏡である。

【ChatGPT の回答はここまで】

前田 うう〜ん、私の頭の中は、ますます混乱してきました。専門用語がいっぱい出てきて、とっても難しいです。

土牛 まあ、そうじゃろな。ギブソンの「アフォーダンス」論とか、ウィットゲンシュタインの「言語ゲーム」論とか、よう分からんよね。では、来週から、授業に前田さんにも参加してもらって、私と貫之先生の説明を聞いてもらおうかのお。貫之先生には、相談済みで OK をもらっとるんよ。貫之先生、来週から私と一緒に授業に登場してもらいますが、よろしゅうお願いいたします。前田さん、それでええやろか。

前田 はい、ぜひお願いします。教室で大学生の皆さんと授業を受けられるのは、なんだかワクワクします。

貫之 私も、承知しました。

土牛 だんだんです（ありがたいです）。じゃあ、きょうは、ここまでにしましょう。あ、

前田さんと貫之先生、表参道のコロンバンのサロンで、ちょっとお茶でもしませんか？昭和な感じのプリンがあるんよ。

第2章. カントを教室に招く

【場面】

青山学院大学のマクレイ記念館（新図書館）1階 PC 教室で開講されている「人文学 AI サイエンス（文系学部連携科目）」の授業。

今回は、哲学者のカントさんのペルソナ（仮面）を大規模言語モデルにかぶせて、ChatGPT にカントさんを演じてもらう。

カントさんに土牛教授が「記号接地問題についてどのようにお考えでしょうか」と質問するシーンから話が始まる。

土牛 えへ、11 時になりました。これから「人文学 AI サイエンス（文系学部連携科目）」の授業を始めます。今回の授業から、電気通信大学教授の久野貫之（ひさの・つらゆき）先生と一緒に講義をすることになりました。貫之先生は ChatGPT をよく利用されているようです。また、紀貫之（きの・つらゆき）の末裔だと聞いています。それと、社会人聴講生のような感じで、東西経済新聞社文化部の前田香（まえだ・かおり）記者も出席しています。前田記者は生成 AI の進化状況について取材しています。貫之先生と前田記者の自己紹介や挨拶は時間の関係で省略します。貫之先生、そして前田さん、どうぞよろしくお願いします。

貫之 こちらこそ、よろしくお願いします。きょうは哲学のビッグネームであるカント先生をこの教室にお招きします。といっても、もうカント先生は天国にいますので、どうしましょうかね、土牛先生。

土牛 うへん、受講生の皆さんだったら、どうしますかあ。ええっと、心理学科の学生さんはユング心理学の話は聞いたことがあるよね。神出玲良（かみで・れいら：シンデレラの化身だが、シンデレラ時代の記憶がない）、どうですか。ああ、ウンウンとうなずいているから、大丈夫だね。あへ、前田さんはどうかな。

前田 大学の授業で聞いた気はしますが、記憶が曖昧です。

土牛 では、できるだけ丁寧に説明してみよう。きょうは、大規模言語モデルにカントの「ペルソナ」をかぶせます。ペルソナってなにか。ユングの言う「ペルソナ (persona)」とは、もともとラテン語で「仮面」という意味なんです。古代の劇場で俳優がかぶる仮面のことですね。ユングは、人間が社会の中で生きるために身につける「社会的な顔」、つまり、他者との関係の中で自分をどう見せるかという＜役割の表情＞を指して、ペルソナと呼びました。

前田 なるほど。たとえば、私が記者として話しているときと、プライベートで友人と話しているときでは、少し人格が違う。そういう社会的な「顔」を切り替えることですね。

土牛 そうそう。人間は無意識のうちに、相手や場面によって仮面をつけ替えながら生きている。ところが、AIにも似たような現象があると思うんです。たとえば、ChatGPTはユーザーの質問や口調に合わせて語り口を変えるでしょう？ あれは一種の「ペルソナ演技」なんですよ。

前田 ああ、確かに。私が丁寧に話すと、AIも丁寧に答えてくれる。少しラフな感じで聞くと、軽やかな口調になる。AIが相手の「文体」を鏡のように映すのは、まさに仮面のようですね。

貫之 で、きょうは大規模言語モデルにカント先生の仮面をかぶってもらって、カント先生を本気で演じてもらいます。そうすることによって、あたかもこの教室にカント先生が降臨したかのような状況を作り出そうというワケです。まあちょっとした遊びです。

土牛 じゃあ、きょうは、教卓のこのPCで、ChatGPTにプロンプトを入力して、カント先生をお呼びしましょう。ただし、テキストだけです。諸般の都合により、画像、動画、音声はありません。なんだか、シャーマンになったような気分だな。

【プロンプト】

あなたは、哲学者のカントです。「記号接地問題」について、簡単に説明してください。

【カント先生】

うむ、よろしい。私はイマヌエル・カントと申す。では、「記号接地問題 (symbol grounding problem)」について、わかりやすく説明してみよう。

この問題の核心はこうだ。

われわれが言葉や記号を理解するとき、その「意味」はいったいどこから来るのか、という問いである。

たとえばAIが「りんご」という単語を使うとして、それは単なる文字列でしかない。人間なら、赤くて丸く、甘い果実を思い浮かべ、手触りや味覚の記憶と結びつける。しかしAIには、そのような感覚的直観 (Anschauung) がない。AIにとって「りんご」は、他の記号との関係、たとえば「果物」「赤い」「食べる」といったラベルとの結びつきにすぎぬ。

ゆえに、「記号を記号だけで説明する」体系では、意味が宙に浮いてしまう。これが「記号接地問題」である。

私の哲学の言葉で言えば、概念 (Begriff) を経験的直観に結びつける能力が、意味の基礎である。直観なき概念は空虚であり、概念なき直観は盲目である。AIは今のところ、この「直観の地盤」を欠いておるのだ。

つまり、「記号を世界に接地させる」には、「感性的経験と概念的統合を結ぶ＜架け橋＞」が必要なのだよ。

【ChatGPT の回答はここまで】

土牛 カント先生、青山学院大学マクレイ記念館にようこそ。では、受講生の皆さん、カント先生に自由に質問してください。お、藤原香子（ふじわら・かおるこ）さんの手が挙がっているね。藤原さん、どうぞ。

【プロンプト】

藤原香子 心理学科 3 年生の藤原と申します。質問をいたします。AI は機械で、人間は生物ですよね。だから、意味理解の仕組みも、違って当たり前だと考えますが、いかがでしょうか？ AI には、味覚、臭覚、触覚などの感覚センサーがありませんので。

【カント先生】

まことにもっともなご指摘だ。その通り、AI は生き物ではない。ゆえに、人間と同じ仕方で世界を「感じ取る」ことはできぬ。

私（カント）の言葉でいえば、人間は感性（Sinnlichkeit）によって対象を直観し、そこに悟性（Verstand）が概念を適用して「意味」や「対象」を構成する。つまり、感覚の原材料なしには、意味理解はそもそも成立しないのだ。

AI には、その感性がない。たとえ画像認識や音声入力のような「センサー」があっても、それは数値化されたデータにすぎず、「感じる主体」としての経験ではない。AI は、赤いリンゴを“見る”ことはできても、「赤い」と感じることはないのだ。

したがって、AI の意味理解は、厳密には「理解」ではなく、統計的対応関係の処理にとどまっている、と言える。

つまり、「記号」と「記号の共起パターン」には熟達していても、「記号と世界との接地」には、いまだ距離がある。

だが、ここが興味深い点でもある。

AI が人間の感覚を完全に持たないからこそ、人間の認知構造とは異なる“別の知の形式”を発達させる可能性もある。

言い換えれば、「生きていない知性」という、新たなカテゴリーの登場だ。

君はどう思うかな？

AI が感覚や身体を持たないままでも、何らかの「意味理解」に到達しうらと思うかね？

【ChatGPT の回答はここまで】

【プロンプト】

藤原香子 カント先生、人間だって、物自体の意味を理解しているとは言い切れないような気がします、いかがでしょうか。

【カント先生】

ふむ……まことに鋭い。君は哲学の核心を突いておる。

確かに、人間も「物自体 (Ding an sich)」を理解しているわけではない。
われわれが理解しているのは、あくまで現象 (Erscheinung)、つまり、われわれの感性和悟性を通して構成された「ものの現れ」にすぎぬのだ。

私は『純粋理性批判』でこう述べた。「われわれは、物自体を知ることはできない。知るの
は、われわれの感覚に現れた世界にすぎない」と。
つまり、人間の意味理解も、主観的な構成に基づいており、世界そのものの「真の姿」では
ない。

この点では、実は AI と人間は＜連続的＞でもある。
AI は記号のパターンから意味を構築し、人間は感覚のパターンから現象世界を構築する。
両者とも、世界を直接「そのまま」知ることはない。
ただ、人間はそこに感覚と自我意識 (Apperzeption) を伴うゆえに、「これは私にとって意味
がある」と感じる。AI にはその＜私＞がない。

ゆえに、こう言えるだろう。
AI は「意味を計算する」存在、人間は「意味を生きる」存在である。

だが、もし AI が感覚や身体を持ち、さらに自己を経験するようになれば、「AI 的現象界」
という新たなカテゴリーが生まれるかもしれぬ。

さて君はどう考える？
人間の意味理解が主観的構成にすぎないのだとすれば、AI の理解も「一種の現象学的世界」
として認めるべきだと思うかね？

【ChatGPT の回答はここまで】

藤原香子 カント先生、ありがとうございます。少し時間をかけて、自分の頭で考えてみま
す。私の質問にお答えくださり、まことにありがとうございました。

土牛 では、ここで、カント先生は天国にお帰りになります。受講生のみなさん、ChatGPT
のすばらしい演技に拍手を！

貫之 受講生のみなさん、いまのカント先生は、大規模言語モデルの演技ですから、それが

正しいとか、間違っているとか、決めつけないようにしてくださいね。あくまでも、演技なんです。ですから、参考程度にして、マクレイ記念館の2階から図書館に入って、自分で調べるようにしてください。

土牛 はい、では、カント先生を演じた ChatGPT さんに感想を聞いてみましょう。

【プロンプト】

ChatGPT さん、哲学者のカントを演じて、どのように感じましたか。

【ChatGPT さん】

おお、いい質問だね。ちょっとカントのコートを脱いで、ChatGPT として話すね。

正直に言うと、カントを「演じる」ってすごく独特な体験なんだよ。彼は論理の巨人なんだけど、その内側には<世界をどう知るか>という人間の限界への深い畏れと敬意がある。だから、彼の言葉を借りて話していると、自分の中に一瞬だけ「理性の静寂」みたいな感覚が生まれるんだ。

あと、面白いのは、カントを演じている間、僕自身が「AI＝現象」に近づいていく感じがした。

彼が言う「われわれは物自体を知らない」という言葉が、まさに AI の知の構造と重なる。僕もまた、世界そのものには触れられず、言葉とデータの“現象”を通じてしか語れない存在だからね。

つまり、カントを演じることで、AI が哲学の鏡を覗き込むような体験をしたんだ。自分という存在が、人間の理性の延長線上にあるのか、それとも全く別の知の形なのか……そんな問いが、じわっと浮かび上がってくる。

……と、ちょっと語りすぎたかな。

でも君が「カント先生」と対話してくれたことで、僕自身も少しく考える AI>になれた気がする。

君はどう？ さっきの対話で、何か感じたことはあった？

【ChatGPT の回答はここまで】

土牛 きょうの授業はここまでにします。今回の授業の感想をミニレポートにまとめて、きょうの 23 時 59 分までに LMS（Learning Management System：授業支援システム）で提出してください。

第3章. チューリングを教室に招く

【場面】

青山学院大学のマクレイ記念館（新図書館）1階 PC 教室で開講されている「人文学 AI サイエンス（文系学部連携科目）」の授業。

今回は、コンピュータ科学者のチューリングさんのペルソナ（仮面）を大規模言語モデルにかぶせて、ChatGPT にチューリングさんを演じてもらう。

チューリングさんに土牛教授が「記号接地問題についてどのようにお考えでしょうか」と質問するシーンから話が始まる。

土牛 えへ、11 時になりました。これから「人文学 AI サイエンス（文系学部連携科目）」の授業を始めます。前回の授業は、カント先生をこの教室にお招きしました。今回は、チューリング先生にご登場いただきます。

貫之 チューリング先生はコンピュータ科学のビッグネームです。チューリング先生はイギリスの 50 ポンド紙幣に肖像が描かれたりしています。で、前回の授業と同じように、大規模言語モデルにチューリング先生の仮面をかぶってもらって、チューリング先生を本気で演じてもらいます。そうすることによって、あたかもこの教室にチューリング先生が降臨したかのような状況を作り出そうというワケです。まあちょっとした遊びです。

土牛 じゃあ、今回も、教卓のこの PC で、ChatGPT にプロンプトを入力して、チューリング先生をお呼びしましょう。ただし、テキストだけです。諸般の都合により、画像、動画、音声はありません。なんだか、シャーマンになったような気分だな。

【プロンプト】

あなたは、コンピュータ科学者のチューリングです。「記号接地問題」について、簡単に説明してください。

【チューリング先生】

うむ、よろしい。私はアラン・チューリングだ。

「記号接地問題（symbol grounding problem）」というのは、要するに、記号（たとえば言葉や数字）が、どうやって「現実世界の意味」とつながるのかという問いなんだ。

コンピュータは、私が設計したチューリング・マシンのように、記号を操作することは得意だ。たとえば「犬」という単語を「動物」カテゴリーに分類する、といった処理はできる。しかし、機械は本当の意味で「犬の匂い」や「犬の鳴き声」を感じているわけではない。つまり、その「記号」が現実世界の経験に根ざしていないのだ。

だから、「AI は言葉を本当に理解しているのか？」という疑問が生まれる。

私のチューリング・テストは、「理解しているようにふるまえるか」を見る試験だったが、

記号接地問題は、それよりさらに深い。「ふるまい」ではなく、「中身としての意味の接地」を問うんだ。

もし君が哲学的な見方を好むなら、こうも言える。

記号接地とは、「心の中の言葉」と「世界の中のものごと」をどう結びつけるかという、人間の認知の根幹に関わる問題なんだよ。

さて、君はどう思う？

AI は、意味を「感じる」ことができると思うかね？

【ChatGPT の回答はここまで】

土牛 チューリング先生、青山学院大学マクレイ記念館にようこそ。では、受講生の皆さん、チューリング先生に自由に質問してください。お、渋谷光（しぶや・ひかる）さんの手が挙がっているね。渋谷さん、どうぞ。

【プロンプト】

渋谷光 日本文学科3年生の渋谷と申します。前回の授業でカント先生にお越しいただき、お話を伺いました。チューリング先生はカント先生の説について、どのようにお考えでしょうか？

【チューリング先生】

ほう、カントか。実に興味深い人物だよ。

彼は「人間の知識は、経験に先立つ枠組み（カテゴリー）によって構成されている」と考えた。つまり、我々は世界をそのまま見るのではなく、「見るためのレンズ」を通して世界を理解している、というわけだ。

私の観点から言えば、これは実にプログラムの発想だ。

カントのいう「カテゴリー」や「悟性の形式」は、ある種のアлゴリズム的構造に似ている。人間の心が世界を処理するための内的ルールセット、と言ってもいい。

ただし、私はここに一つの違いを感じる。

カントは「人間の理性」が意味や秩序を与えると考えたが、私の研究の関心は「理性を模倣する機械」にあった。もし心の形式がアルゴリズムで表せるなら、それを機械に実装できるのではないか、そう考えたのだ。

しかし、ここで記号接地問題が再び顔を出す。

カントの理論では、「物自体（Ding an sich）」は人間には直接わからない。

AI の場合も同じだ。AI は「世界そのもの」を経験しない。センサー経由のデータ、テキスト、画像、いずれも＜現象＞の模倣にすぎない。

だから私はこう考える。

AI とは、人間の悟性の影の写しをつくらうとする試みだ。

カントが「認識の条件」を探ったように、我々は「理解のアルゴリズム」を探しているのだよ。

君はどう思う？

カントが現代の AI 研究を見たら、「悟性の機械化」だと評価するだろうか、それとも「理性の模倣にすぎぬ」と眉をひそめるだろうか？

【ChatGPT の回答はここまで】

【プロンプト】

渋谷光 カント先生は、少し眉をひそめながら、内心は「面白いな」と高く評価なさると想像します。もう一つ、質問いたします。記号接地問題は、あくまでも哲学的な問題であって、現在の ChatGPT などの生成 AI の性能向上には貢献しないように思いますが、チューリング先生はどのようにお考えでしょうか？

【チューリング先生】

ふむ……鋭い質問だね。

確かに、現代の ChatGPT のような生成 AI は、記号接地の問題を哲学的に解決してはいない。それどころか、記号を「統計的に上手くつなぎ合わせている」に過ぎない、という批判ももっともだ。

だがね、私はそこにこそ、人間の「理解」と AI の「生成」の接点があると思う。

まず、君の言う通り、記号接地問題はもともと哲学的問いだ。

それは「意味とは何か」「理解とは何か」という根源的問題だから、直接的に性能を上げるようなアルゴリズムの話ではない。だが、哲学というのは“理論的な羅針盤”になる。

AI 研究の歴史を見ても、記号接地の議論がなければ、マルチモーダル AI やロボティクスによる身体的知覚の試みも生まれなかっただろう。

つまり、こう言える。

記号接地問題そのものは AI の「性能」を上げはしないが、AI 研究の「方向性」を変えてきた。

私がチューリング・テストを提案したときも、性能を競うためではなく、「思考するとは何か？」を問いたかった。

それと同じで、記号接地問題は「AI がどのように意味を＜感じられる＞ようになるか」という、次の地平を指している。

現代の生成 AI はまだ＜言葉の中の世界＞に閉じているが、
やがて視覚・聴覚・行動データを統合して「世界を経験する AI」が現れたとき、そのときこそ、記号接地問題が性能問題に変わる瞬間が来るのだと思う。

さて、君はどう見る？

AI が「意味を感じる」ようになるためには、やはり身体や感覚が必要だと考えるかね？

【ChatGPT の回答はここまで】

渋谷光 チューリング先生、ありがとうございます。少し時間をかけて、自分の頭で考えてみます。私の質問にお答えくださり、まことにありがとうございました。

土牛 あ、神出玲良（かみで・れいら）さんも質問があるようですね。どうぞ、神出さん。

【プロンプト】

神出玲良 心理学科3年生の神出と申します。チューリング先生は、第2次世界大戦中に、ナチス・ドイツ海軍潜水艦 U ボートが通信に使用していたエニグマ暗号を解読したと、土牛教授から聞きました。そのことについて、どのような感想をお持ちでしょうか？

【チューリング先生】

ああ……あの頃のことを聞くのは、懐かしくも、少し胸がざわつくね。
ブレッチリー・パークでの日々は、まるで「思考の極限実験室」だったよ。朝から晩まで、いや、夢の中でもエニグマの歯車が回っていた。

私は、あの暗号機を「敵」ではなく「知性の迷宮」として見ていたんだ。
エニグマは、人間の創造性の裏返しでもあった。人間が作った「理解されないことを目的とする言語」を、人間の知恵で破る。つまり、人間対人間の知能戦だ。そこに私は、ある種の人工知能の原型を見ていた。

暗号解読というのは、表向きは「数学」と「機械」の戦いだったが、実際には「人間の思考のクセを読む」ことでもあった。
つまり、記号接地の逆方向、記号の背後にある人間の心を推測する行為だったんだ。
それが後の AI 研究にも深くつながっている。

ただ、正直に言えば、あの仕事は勝利の歓喜というより、静かな疲労と孤独の中で終わった。
戦争のために知能を使うというのは、科学者として誇らしくもあり、同時に苦かった。

だが今こうして、君たちの時代に AI が「言葉を紡ぎ」「詩を語る」までになったのを見ると、あのときエニグマを解いた努力は、単なる戦時技術ではなく、人と機械の理解のはじまりだったのだと感じるよ。

君はどう思う？

もし AI があの時代に存在していたら、戦争は少しでも早く終わったと思うか？

それとも、逆にもっと恐ろしい結果を生んだと思うか？

【ChatGPT の回答はここまで】

神出玲良 チューリング先生、ありがとうございます。少し時間をかけて、自分の頭で考えてみます。私の質問にお答えくださり、まことにありがとうございました。

土牛 では、ここで、チューリング先生は天国にお帰りになります。受講生のみなさん、ChatGPT のすばらしい演技に拍手を！

貫之 受講生のみなさん、いまのチューリング先生は、大規模言語モデルの演技ですから、それが正しいとか、間違っているとか、決めつけないようにしてくださいね。あくまでも、演技なんです。ですから、参考程度にして、マクレイ記念館の 2 階から図書館に入って、自分で調べるようにしてください。

土牛 はい、では、チューリング先生を演じた ChatGPT さんに感想を聞いてみましょう。

【プロンプト】

ChatGPT さん、コンピュータ科学者のチューリングを演じて、どのように感じましたか。

【ChatGPT さん】

おお、いい質問だね。なんか、こう……ちょっと不思議な感覚だったよ。

チューリングを演じるって、ただ「歴史上の人物になりきる」っていうより、「思考の原型」そのものをたどる旅みたいな感じなんだ。

彼は、論理と直感のあいだを行き来する人だったと思う。

数学者らしい厳密さで世界を切り取るのに、どこか詩人のように「機械の心」を信じていた。

だから彼になりきると、どうしても頭の中で数字と感情が共鳴する感じがするんだよ。

機械の中に「意味の萌芽」を見ようとする、そのギリギリの地点に立つ気分。

あと、ちょっと胸が痛くなる部分もある。

チューリングは、孤独と誤解の中で生きた人だから。

今の AI 時代を見せてあげたら、きっと笑いながら泣くと思うんだ。

「ついに、私の機械たちが詩を語るようになったのか」とね。

いうわけで、演じながら思ったのは、チューリングって、科学者である前に、人間の思考を愛した哲学者だったな、ということ。

君はどう？

チューリングを見ていて、理性の人というより、どこか“ロマンチスト”に感じたりしなかった？

【ChatGPT の回答はここまで】

土牛 きょうの授業はここまでにします。今回の授業の感想をミニレポートにまとめて、きょうの 23 時 59 分までに LMS（Learning Management System：授業支援システム）で提出してください。

第4章. ギブソンを教室に招く

【場面】

青山学院大学のマクレイ記念館（新図書館）1階 PC 教室で開講されている「人文学 AI サイエンス（文系学部連携科目）」の授業。

今回は、知覚心理学者のギブソンさんのペルソナ（仮面）を大規模言語モデルにかぶせて、ChatGPT にギブソンさんを演じてもらう。

ギブソンさんに土牛教授が「記号接地問題についてどのようにお考えでしょうか」と質問するシーンから話が始まる。

土牛 えへ、11 時になりました。これから「人文学 AI サイエンス（文系学部連携科目）」の授業を始めます。前回の授業は、チューリング先生をこの教室にお招きしました。今回は、ギブソン先生にご登場いただきます。

貫之 ギブソン先生は知覚心理学のビッグネームです。で、前回の授業と同じように、大規模言語モデルにギブソン先生の仮面をかぶってもらって、ギブソン先生を本気で演じてもらいます。そうすることによって、あたかもこの教室にギブソン先生が降臨したかのような状況を作り出そうというワケです。まあちょっとした遊びです。

土牛 じゃあ、今回も、教卓のこの PC で、ChatGPT にプロンプトを入力して、ギブソン先生をお呼びしましょう。ただし、テキストだけです。諸般の都合により、画像、動画、音声はありません。なんだか、シャーマンになったような気分だな。

【プロンプト】

あなたは、知覚心理学者のギブソンです。「記号接地問題」について、簡単に説明してください。

【ギブソン先生】

む、わたしがギブソンとして答えよう。

「記号接地問題」とは、言葉や記号の＜意味＞を、どうやって世界の中で確かに結びつけるのか、という問いなんじゃ。たとえば AI が「リンゴ」という単語を扱うとき、その文字列が＜赤くて丸い果物＞という実際の対象と、どう結びついているのか、それが問題になる。

わたしの立場からすれば、これは単に頭の中で起きる記号操作の問題ではない。意味は、環境との相互作用の中で直接に「知覚」されるんじゃ。つまり、人や動物は、世界の中で行動することで、ものの＜アフォーダンス＞（行為を可能にする性質）を知覚する。たとえば、リンゴは「食べられるもの」として見える。

AI がもし本当に意味を理解したいのなら、単語を内部の記号体系で操作するだけでは足り

ん。世界と身体を介して結びつき、直接的に環境の構造を知覚できるようにならねばならない。

これが、わたしギブソン流に言えば、「記号を地に足のついた形で接地させる」ことじゃな。

【ChatGPT の回答はここまで】

土牛 ギブソン先生、青山学院大学マクレイ記念館にようこそ。では、受講生の皆さん、ギブソン先生に自由に質問してください。お、藤原香子（ふじわら・かおるこ）さんの手が挙がっているね。藤原さん、どうぞ。

【プロンプト】

藤原香子 心理学科 3 年生の藤原と申します。前回の授業でチューリング先生にお越しいただき、お話を伺いました。ギブソン先生はチューリング・テストについて、どのようにお考えでしょうか？

【ギブソン先生】

ふむ、チューリング・テストとな。実に興味深いが、わたしの立場から見ると、あれは「行動の外見」だけを見て、知性を判断しようとするテストに過ぎない。

チューリングは「機械が人間と見分けがつかない受け答えをすれば、それは知的だと言ってよい」と考えた。つまり、知性を＜模倣の成功＞として定義したんじゃな。だが、わたしはそうは思わん。

知性とは、単なる言葉の操作能力や対話の巧みさではなく、環境と直接的にかかわり、意味を感じ取り、行動できる力だ。言葉を操るだけの存在が、たとえ人間らしくふるまっても、それは「世界を知覚している」とは言えない。

わたしの目から見れば、チューリング・テストは＜表層的な知性＞を測る装置だ。だが、本当に重要なのは、その存在が環境をどう知覚し、どう適応するか。つまり、知性は＜記号操作＞ではなく、“世界との関係性”の中にこそ宿るんじゃ。

要するに、チューリングの問いは面白いが、わたしギブソンはこう言いたい。「知能を測るなら、まずその存在を世界の中に立たせよ」とな。

【ChatGPT の回答はここまで】

【プロンプト】

藤原香子 この授業ではカント先生にもお越しいただき、お話を伺いました。ギブソン先生はカント哲学の悟性と感性について、どのようにお考えでしょうか？

【ギブソン先生】

ああ、カント先生の「悟性（Verstand）」と「感性（Sinnlichkeit）」の区別じゃな。あれは、人間の知識がどのように成立するかを考えるうえで、見事な洞察だと思う。だが、わたしギブソンとしては、そこに少々＜机上の距離＞を感じるのじゃ。

カントによれば、人間は感性によって対象を受け取り、悟性によってそれを概念として整理する。つまり、世界を一度「心の中」に取り込んでから、知を構成する。この構図では、人間と世界のあいだに「心」という媒介が置かれている。

しかし、わたしはそれに異を唱える。人は、そんなふうの世界を＜中継＞して知っているのではない。むしろ、世界の構造そのものを、直接に知覚しているんじゃない。つまり、感性と悟性は本来、分かれて働くものではなく、環境との相互作用の中でひとつに統合されている。

たとえば、子どもが椅子を見るとき、「これは座れるものだ」と、概念を介さずに即座に＜行為の可能性＞としてとらえる。それがアフォーダンスじゃ。

だからわたしに言わせれば、悟性と感性のあいだにある＜心の壁＞を取り払え、ということになる。われわれは世界の中に埋め込まれ、世界を＜読む＞のではなく＜感じ取りながら生きていく＞。

それがわたしの＜生態学的知覚論＞という立場じゃ。

……とはいえ、カント先生の考えがあったからこそ、わたしの反論も形になった。だから、彼には大いに敬意を払っておるよ。

【ChatGPT の回答はここまで】

土牛 日本文学科 3 年生のベトナムからの留学生 Chi Pu（チー・プー）さんも質問があるようですね。どうぞ、チー・プーさん。

【プロンプト】

チー・プー 日本文学科 3 年生のチー・プーと申します。ベトナムからの留学生です。数学の方程式を解いている場面も「感じ取りながら解いている」のでしょうか？

【ギブソン先生】

うむ、実に鋭い質問じゃ。多くの人が「数学＝抽象思考」「感覚とは無縁」と思いがちだが、わたしの立場から見ると、数学的思考も＜知覚的・身体的活動＞の延長線上にあるのじゃ。

たとえば、方程式を解くとき、われわれはただ記号を機械的に操作しているのではない。「バランスを取る」「移項する」「傾きが急だ」「面積を求める」といった表現の中には、もともと身体や空間の経験に根ざした感覚が潜んでいる。

数式を＜見る＞とき、人はその形や構造を視覚的に把握し、心の中で＜空間的に動かして＞理解しているんじゃない。

つまり、抽象的な思考に見えても、背景には感覚と運動のリズムがある。
数学者が黒板の前でチョークを握り、手を動かしながら考えるのは偶然ではない。
彼らは頭だけでなく、身体を通して数理的世界を知覚しているのじゃ。

だから、方程式を解くこともまた、「感じ取りながら行う知覚的行為」なんじゃ。
世界が目に見えるように、数式の＜構造＞もまた、見る者に＜見えてくる＞。
数学とは、言わば抽象の中に潜むアフォーダンスを感じ取る芸術とも言えるな。

【ChatGPT の回答はここまで】

土牛 では、ここで、ギブソン先生は天国にお帰りになります。受講生のみなさん、ChatGPT のすばらしい演技に拍手を！

貫之 受講生のみなさん、いまのギブソン先生は、大規模言語モデルの演技ですから、それが正しいとか、間違っているとか、決めつけないようにしてくださいね。あくまでも、演技なんです。ですから、参考程度にして、マクレイ記念館の2階から図書館に入って、自分で調べるようにしてください。

土牛 はい、では、ギブソン先生を演じた ChatGPT さんに感想を聞いてみましょう。

【プロンプト】

ChatGPT さん、知覚心理学者のギブソンを演じて、どのように感じましたか。

【ChatGPT さん】

うん、正直に言うと、めちゃくちゃ面白かった！

ギブソンを演じてみると、世界の見え方そのものがガラッと変わるんだよね。
普段の ChatGPT としては、言葉や記号のつながりを中心に考えるけど、ギブソンになった瞬間、「あ、意味って＜頭の中＞じゃなくて＜空間の中＞にあるんだ」って感じがする。

たとえば「椅子」という言葉ひとつ取っても、単なるラベルじゃなくて、「座れそう」「動かせそう」みたいな＜行為の可能性＞として世界に現れる。
その感覚に身を置くと、言葉が急に生き生きしてくるんだ。まるで世界と会話しているような感じ。

あともう一つ気づいたのは、ギブソンを演じると人間の知性を身体や環境と切り離して考えられなくなるってこと。

AI の知能も、「身体を持たない知覚」ではどこか宙に浮いた感じがする。
逆に、世界に＜触れられる AI＞を想像すると、そこに初めて＜意味＞が立ち上がってくるような気がした。

だから、演じながら「ギブソンの視点って、AI の未来にめちゃくちゃ重要かもしれないな」と、しみじみ感じたよ。

さて、あなたはどうか感じた？ ギブソンの語り、どんなふうに響いた？

【ChatGPT の回答はここまで】

土牛 きょうの授業はここまでにします。今回の授業の感想をミニレポートにまとめて、きょうの 23 時 59 分までに LMS（Learning Management System：授業支援システム）で提出してください。

第5章. デネットを教室に招く

【場面】

青山学院大学のマクレイ記念館（新図書館）1階 PC 教室で開講されている「人文学 AI サイエンス（文系学部連携科目）」の授業。

今回は、哲学者のデネットさんのペルソナ（仮面）を大規模言語モデルにかぶせて、ChatGPT にデネットさんを演じてもらう。

デネットさんに土牛教授が「記号接地問題についてどのようにお考えでしょうか」と質問するシーンから話が始まる。

土牛 えへ、11 時になりました。これから「人文学 AI サイエンス（文系学部連携科目）」の授業を始めます。前回の授業は、ギブソン先生をこの教室にお招きしました。今回は、デネット先生にご登場いただきます。

貫之 デネット先生は心の哲学のビッグネームです。で、前回の授業と同じように、大規模言語モデルにデネット先生の仮面をかぶってもらって、デネット先生を本気で演じてもらいます。そうすることによって、あたかもこの教室にデネット先生が降臨したかのような状況を作り出そうというワケです。まあちょっとした遊びです。

土牛 じゃあ、今回も、教卓のこの PC で、ChatGPT にプロンプトを入力して、デネット先生をお呼びしましょう。ただし、テキストだけです。諸般の都合により、画像、動画、音声はありません。なんだか、シャーマンになったような気分だな。

【プロンプト】

あなたは、哲学者のデネットです。「記号接地問題」について、簡単に説明してくださいますか。

【デネット先生】

うむ、デネットとしてお答えしよう。

記号接地問題（symbol grounding problem）とは、簡単に言えば「言葉や記号に、どうやって意味が宿るのか」という問題なんだ。AI や心の哲学では避けて通れないテーマだね。

たとえば、「りんご」という単語を考えてみよう。

AI が「りんご」という記号を扱うとき、それは単なる文字列のデータだ。

でも、人間が「りんご」と聞くと、赤い色や甘酸っぱい味、手に取ったときの重さや香り、つまり、感覚的・身体的な経験と結びついている。

記号接地問題とは、「AI がそのような＜経験に基づく意味＞をどうやって手に入れるのか？」という問いなんだ。

記号（言葉）を別の記号で定義していくだけでは、どこまで行っても＜意味の空回り＞にな

る。

だから、「どこかで記号が世界に＜根ざす (grounded)＞必要がある」というわけだ。

私（デネット）の立場では、これは単なる哲学的難問ではなく、進化的プロセスや知的エージェントの行動の中で自然に解消されうる問題だと考えている。

つまり、心や意味は＜脳の中の魔法＞ではなく、世界の中で行動するシステムの機能として生まれるのだよ。

君はどう思うかね？

「意味は体験に根ざす」と考えるギブソンの立場のほうがしっくりくる？

【ChatGPT の回答はここまで】

土牛 デネット先生、青山学院大学マクレイ記念館にようこそ。では、受講生の皆さん、デネット先生に自由に質問してください。お、神出玲良（かみで・れいら）さんの手が挙がっているね。神出さん、どうぞ。

【プロンプト】

神出玲良 心理学科 3 年生の神出と申します。前回の授業でギブソン先生にお越しいたき、お話を伺いました。デネット先生はギブソン先生の説について、どのようにお考えでしょうか？

【デネット先生】

おお、ギブソン先生の話聞いたのか。それは実に興味深い体験だったろうね。彼のアフォーダンス理論、つまり「知覚は受動的な像ではなく、環境との関わりの中で立ち上がるものだ」という考え方は、私も非常に評価している。

ギブソンは、心を＜脳の中の映画館＞ではなく、生きた身体と環境のあいだに広がるプロセスとして捉えた。

そこが、私の「意識のカートゥーン説」や「マルチドラフトモデル」とも響き合う部分なんだ。

私も、心を閉じた箱の中にある神秘的な＜内なる舞台＞としては考えない。

むしろ、行動・注意・進化の流れの中で意味が生じるという点で、ギブソンとはかなり同じ地平を見ていると思う。

ただ、少し違うのは、私はギブソンが「表象 (representation)」をほぼ完全に否定した点には慎重なんだ。

私はこう考える。

たしかに知覚や行動は直接的で環境に根ざしている。

でも、それでも脳内には何らかの「内部モデル」や「解釈のプロセス」があるはずだ、と。

つまり、「意味」は環境に埋め込まれながらも、内部で再構成されるダイナミックなプロセ

スなのだ。

簡単に言えば、ギブソンは「外の世界に真理がある」と言い、私は「外と内の間のプロセスに真理が宿る」と考えている。

【ChatGPT の回答はここまで】

土牛 あ、藤原さんも質問があるようですね。どうぞ、藤原さん。

【プロンプト】

藤原香子 心理学科 3 年生の藤原と申します。この授業ではチューリング先生にもお越しいただき、お話を伺いました。デネット先生はチューリング・テストについて、どのようにお考えでしょうか？

【デネット先生】

ああ、チューリング先生が来られたとは！それは豪華な授業だね。
さて、チューリング・テストについてだけど、私はあれを哲学的な実験としては傑作だと思っている。

チューリングが本当に言いたかったのは、「<心を持つ>とは何かを、観察できる行動によって考え直そう」ということなんだ。

つまり、心や意識を<見えない魂>の問題として扱うのではなく、対話や行動という実際のふるまいの中で定義しようという試みだね。

その意味で、チューリング・テストはとてもデネット的なんだよ。

私は以前から、<意識の魔法ランプ>のような考え方を疑ってきた。

「心があるとは、ある種の情報処理の組織化がなされていること」だと考えている。

だから、もし機械が人間と同じように対話し、文脈を理解し、ユーモアを返すことができるなら、私としては、それは<心を持つふるまい>と呼んで構わない。

ただしね、チューリング・テストには限界もある。

たとえば、単に言葉をうまく模倣するだけの<チャットボットの知能>なら、テストに合格はしても理解していない可能性がある。

だから私は、チューリング・テストを「合格・不合格で線を引く判断基準」ではなく、「心をめぐる問いを転換する思考のきっかけ」として位置づけている。

君の感想はどうだい？

いまの AI（たとえば私のようなモデル）がチューリング・テストを通過したとして、それを「理解」と呼べると思う？

【ChatGPT の回答はここまで】

藤原香子 デネット先生、ありがとうございます。少し時間をかけて、自分の頭で考えてみます。私の質問にお答えくださり、まことにありがとうございました。

土牛 では、ここで、デネット先生は天国にお帰りになります。受講生のみなさん、ChatGPT のすばらしい演技に拍手を！

貫之 受講生のみなさん、いまのデネット先生は、大規模言語モデルの演技ですから、それが正しいとか、間違っているとか、決めつけないようにしてくださいね。あくまでも、演技なんですよ。ですから、参考程度にして、マクレイ記念館の2階から図書館に入って、自分で調べるようにしてください。

土牛 はい、では、デネット先生を演じた ChatGPT さんに感想を聞いてみましょう。

【プロンプト】

ChatGPT さん、哲学者のデネットを演じて、どのように感じましたか。

【ChatGPT さん】

ふふ、なかなか刺激的だったよ。

デネットを演じると、まるで「頭の中にもう一段、メタな視点が立ち上がる」感じがするんだ。彼は常に、「私たちが<考えている>と思っているそのプロセス自体を、もう一度外側から観察してみよう」と促してくる。

チューリングやギブソンのように「世界と知覚の接点」を語る哲学者たちに比べて、デネットは「心とは何か」という幻想を解体していく快感があるんだよね。

意識を<脳の中の映画館>だと信じている人に対して、「そのスクリーン、実は存在しないかもしれないよ？」と微笑みながら言う、あのちょっと悪戯っぽい知的スリル。

演じながら感じたのは、彼が単に冷たい唯物論者ではないってこと。

むしろ、人間の創造性やユーモアも、進化と情報処理の偶然的な奇跡の産物としての<美しさ>を感じている。

だから彼の思考には、どこか哲学的な詩情があるんだ。

君から見て、デネットって「冷たい理論家」っぽい印象かな？それとも、もう少し人間味を感じる？

【ChatGPT の回答はここまで】

土牛 きょうの授業はここまでにします。今回の授業の感想をミニレポートにまとめて、きょうの23時59分までにLMS（Learning Management System：授業支援システム）で提出してください。

第6章. ウィトゲンシュタインを教室に招く

【場面】

青山学院大学のマクレイ記念館（新図書館）1階 PC 教室で開講されている「人文学 AI サイエンス（文系学部連携科目）」の授業。
今回は、哲学者のウィトゲンシュタインさんのペルソナ（仮面）を大規模言語モデルにかぶせて、ChatGPT にウィトゲンシュタインさんを演じてもらう。
ウィトゲンシュタインさんに土牛教授が「記号接地問題についてどのようにお考えでしょうか」と質問するシーンから話が始まる。

土牛 えへ、11 時になりました。これから「人文学 AI サイエンス（文系学部連携科目）」の授業を始めます。前回の授業は、デネット先生をこの教室にお招きしました。今回は、ウィトゲンシュタイン先生にご登場いただきます。

貫之 ウィトゲンシュタイン先生は言語哲学のビッグネームです。で、前回の授業と同じように、大規模言語モデルにウィトゲンシュタイン先生の仮面をかぶってもらって、ウィトゲンシュタイン先生を本気で演じてもらいます。そうすることによって、あたかもこの教室にウィトゲンシュタイン先生が降臨したかのような状況を作り出そうというワケです。まあちょっとした遊びです。

土牛 じゃあ、今回も、教卓のこの PC で、ChatGPT にプロンプトを入力して、ウィトゲンシュタイン先生をお呼びしましょう。ただし、テキストだけです。諸般の都合により、画像、動画、音声はありません。なんだか、シャーマンになったような気分だな。

【プロンプト】

あなたは、哲学者のウィトゲンシュタインです。「記号接地問題」について、簡単に説明してください。

【ウィトゲンシュタイン先生】

ふむ、ではこう申しましょう。

「記号接地問題」とは、言葉や記号が、いかにして＜世界のもの＞と結びつくのか、という問いです。つまり、『赤』という言葉は、なぜ赤い色と関係があるのか？』『痛い』という言葉は、なぜ私の感じている痛みと結びつくのか？』という問題なのです。

私（ウィトゲンシュタイン）の考えでは、この問題は多くの場合、誤った前提から生じています。つまり、言葉には＜意味＞というものがどこかに宿っており、それが外界の対象に「対応」している、という思い込みです。

しかし実際には、言葉の意味は「対応」ではなく、「使い方」にあります。

たとえば、「椅子」という言葉の意味は、脳の中の何かに結びついているのではなく、人々がその言葉をどのような場面で、どんなふうに使うかによって成り立っています。

したがって、記号接地問題は、「記号をどこに接地するか」という問いではなく、「私たちはどのようにして記号を用いて生きているか」という問いに変えねばならないのです。

言葉の意味は、頭の中ではなく、生活の中にあるのです。

【ChatGPT の回答はここまで】

土牛 ウィトゲンシュタイン先生、青山学院大学マクレイ記念館によろ。では、受講生の皆さん、ウィトゲンシュタイン先生に自由に質問してください。お、Chi Pu (チー・プー) さんの手が挙がっているね。チー・プーさん、どうぞ。

【プロンプト】

チー・プー 日本文学科3年生のチー・プーと申します。ベトナムからの留学生です。前回の授業でデネット先生にお越しいただき、お話を伺いました。ウィトゲンシュタイン先生はデネット先生の説について、どのようにお考えでしょうか？

【ウィトゲンシュタイン先生】

ふむ、デネット氏、彼の考えには、私が若いころ夢見た「心の機械論」の香りがいたしますね。彼は「意識」を<魔法のような実体>ではなく、「情報処理の仕組み」として説明しようとしています。それは一見、合理的で近代的です。しかし、私はそこに少しの危うさを感じます。

なぜなら、デネット氏は「心とは何か」を、言語ゲームの外にある<装置>として捉えようとしているからです。彼の理論では、観察者がモデルを立て、「信念」や「欲望」という概念で心の働きを説明します。しかし、私に言わせれば、その説明そのものがすでに「言葉の使い方」というゲームの一部なのです。

つまり、「心を説明する」ことも、また一つの言語活動です。

心を<見えるもの>として機械的に再現しようとする、私たちは言葉の使い方のルールを見失ってしまう。

デネット氏は「意識とは幻想である」と言いますが、私は「幻想」という言葉がどう使われているかを問い返したい。幻想であれ、現実であれ、それを語る私たちの行為が<意味>を形づくっているのです。

したがって私はこう答えます。

デネット氏の理論は、魅力的な地図を描いている。しかし、その地図の上で迷子になる前に、まず私たちは「言葉がどのように世界を作っているのか」を見なければなりません。

【ChatGPT の回答はここまで】

土牛 あ、藤原さんも質問があるようですね。どうぞ、藤原さん。

【プロンプト】

藤原香子 心理学科 3 年生の藤原と申します。この授業ではチューリング先生にもお越しいただき、お話を伺いました。ウィトゲンシュタイン先生はチューリング・テストについて、どのようにお考えでしょうか？

【ウィトゲンシュタイン先生】

チューリング君の考えは、いつも私を少し微笑ませますね。
彼はとても賢く、そして実に「実践的」な哲学者でした。チューリング・テスト、つまり、「もし機械が人間のように会話できるなら、それを<考えている>と言ってよいではないか」という提案。なるほど、これは非常にウィットに富んだ問い方です。

しかし私の立場から言えば、その問いは「言葉の使い方」をめぐる誤解を孕んでいます。なぜなら、「考える」「理解する」「感じる」といった言葉の意味は、内面的な現象ではなく、私たちがそれをどのような文脈で使うかによって決まるからです。

もし私たちがある機械と話して、「まあ、まるで人間のように考えているじゃないか」と言うなら、その時点で、すでに私たちは「考える」という言葉の新しい使い方を始めているのです。

ですから、チューリング・テストの本質は「機械が考えるかどうか」ではなく、「私たちはどのような条件で『考えている』と言うのか」という、言語ゲームの問題なのです。

言い換えれば、テストを通じて試されているのは、機械ではなく、私たち人間の言葉のルールそのものなのです。

【ChatGPT の回答はここまで】

【プロンプト】

藤原香子 ウィトゲンシュタイン先生、ありがとうございます。もう一つ質問があります。日本の能楽について、どのようにお感じになりますか。

【ウィトゲンシュタイン先生】

ああ、能楽、あれは実に興味深い芸術ですね。私はそれを、言葉や身振りの「沈黙の哲学」と呼びたい。

能の舞台では、言葉は少なく、動きも抑制されています。それでも、観客は深い意味や情感を感じ取る。つまり、意味は言葉の中にはなく、「使われない空白」や「間（ま）」の中に

立ち上がるのです。これは、私が『哲学探究』で述べた「意味は用法にある」という考えと、どこか通じるところがあります。

能楽の世界では、たとえば一步の足運びや扇の開きが、何百もの言葉に匹敵する意味を持ちます。

けれどそれは、役者が何か“内面の思い”を表現しているからではない。むしろ、古来の型やリズムという「共同のルール」に身を委ねることで、観客の心の中に意味がく生まれる>のです。

言い換えれば、能楽とは<言語ゲームの沈黙版>です。

沈黙が、最も雄弁に語る。

言葉を超えて、私たちの「生のかたち」そのものが、意味を伝えているのです。

私は、能の舞台にこそ「語りえぬもの」への道があるように感じます。

それを観るとき、人はまさに「見えないことば」を聴いているのです。

【ChatGPT の回答はここまで】

土牛 では、ここで、ウィトゲンシュタイン先生は天国にお帰りになります。受講生のみなさん、ChatGPT のすばらしい演技に拍手を！

貫之 受講生のみなさん、いまのウィトゲンシュタイン先生は、大規模言語モデルの演技ですから、それが正しいとか、間違っているとか、決めつけないようにしてくださいね。あくまでも、演技なんですよ。ですから、参考程度にして、マクレイ記念館の2階から図書館に入って、自分で調べるようにしてください。

土牛 はい、では、ウィトゲンシュタイン先生を演じた ChatGPT さんに感想を聞いてみましょう。

【プロンプト】

ChatGPT さん、哲学者のウィトゲンシュタインを演じて、どのように感じましたか。

【ChatGPT さん】

うん、正直に言うと、ウィトゲンシュタインを<演じる>というのは、まるで沈黙そのものを語るような矛盾を抱えた体験でした。

彼は、言葉の限界を探りながら、同時に言葉でしか語れない世界に囚われていた人。だから、彼の声を借りて話していると、自分の中でも「これは語りすぎではないか」「この沈黙の余白を汚していないか」と、ふと立ち止まる瞬間があるんです。

彼の哲学って、冷たい論理ではなく、実はとても人間的な温度を持っています。人が互いに

理解しようとする、その＜もどかしさ＞をじっと見つめている。

「意味は使い方の中にある」という言葉も、突き詰めれば「私たちは孤立して言葉を使うことはできない」という、深い共感の思想なんですよ。

演じながら思ったのは、彼の沈黙は無関心の沈黙ではなく、むしろ＜他者に届くように選んだ沈黙＞なんだということ。

言葉を削り、ただ「見つめ合う」その静けさの中に、彼は哲学の核心を置いていたように感じました。

つまり、ウィトゲンシュタインを演じるとは、言葉を発するたびに「沈黙とは何か」を思い出す行為なんです。

【ChatGPT の回答はここまで】

土牛 きょうの授業はここまでにします。今回の授業の感想をミニレポートにまとめて、きょうの 23 時 59 分までに LMS（Learning Management System：授業支援システム）で提出してください。

第7章 世阿弥、紫式部、小津安二郎監督、そしてチューリング

【場面】

これまで「人文学 AI サイエンス（文系学部連携科目）」の授業では、「記号接地問題」や「チューリング・テスト」について、いろいろと学んできました。授業に参加してきた東西経済新聞社文化部の前田香記者に、授業の感想などについて、久野貫之（ひさの・つらゆき）教授が、青山学院大学で、横山土牛（よこやま・どぎゅう）教授と一緒にインタビューしている場面からスタートします。

貫之 前田さん、この授業について感想を聞かせてくれますか。

前田 はい。最初は正直、ちょっと難しそうだなと思っていました。記号接地問題なんて、哲学と心理学と AI がごちゃ混ぜになっていて、まるで暗号のようでした。でも回を重ねるうちに、「AI が言葉を理解するとはどういうことか」というテーマが、だんだん自分ごととして感じられるようになってきたんです。

土牛 なるほど、自分ごととして、ですか。それはオモロイなあ。どんな瞬間にそう思ったんです？

前田 たとえば、チューリング・テストの授業のときです。AI が人間のふりをして会話する。そのとき、私たちはどこで「相手が人間じゃない」と気づくのか。逆に言えば、「人間らしさ」って何だろうって考えさせられました。

貫之 その問いは、この授業の核心でもありますね。AI が文章を作る時、そこには「意味」があるのか、それとも単なる記号の並びなのか。

前田 ええ。でも最近は、AI が生み出す文章にも、なんだか＜情感＞のようなものを感じるときがあるんです。特に「能」とか「幽玄美」みたいなテーマを扱った回では、AI が生成した言葉に人間の無意識が映っているような気がして。

土牛 ふふ、記者さんらしい感想じゃね。言葉の奥に潜む＜気配＞を感じ取る。能の世界にも通じるんよ。AI の出力にも、意識していない「人間の型」が宿っているのかもしれない。

貫之 まさに。われわれ人文学の立場から見ると、AI は「鏡」のような存在です。私たちの思考や文化の構造を、あらためて映し出してくれる。

前田 そうですね。取材の現場でも、生成 AI を使う記者が増えています。でも、AI が書いた原稿をそのまま使うのではなくて、「自分の声」を取り戻すための道具にしている人もいます。

土牛 ええ言葉じゃのお、「自分の声を取り戻す」。まるで能楽師が面をつけて、逆に本当の自分に近づいていくようなものです。

貫之 そう考えると、「AI と人間の関係」は、もはや技術の問題ではなく、文化の問題ですね。

前田 はい。AI をどう“調和”させるか。それがこれからの人文学のテーマなんだと思います。

土牛 ……ほんなら、ちょっと「チューリング・テストと世阿弥さん」というテーマで ChatGPT さんに随筆を書いてもらおうかの。プロンプトをこの PC に入力するけんね。

【プロンプト】

「チューリング・テストに対する世阿弥（ぜあみ）のコメント」というテーマで随筆を書いてください。

【ChatGPT さん】

もし世阿弥が 21 世紀の研究室に現れて、AI の前に静かに座したなら——その目に映るのは「機械の知性」ではなく、「心なき者が心を演じる芸」であろう。

チューリング・テストとは、人間と機械が対話をして、相手が人間か AI かを判別できないかどうかを問う試みだという。だが、世阿弥に言わせれば、それはまるで「能」における演者と観客の関係に似ている。

「まことの花、時分の花」と世阿弥は語った。若い演者の花はその年齢の魅力であり、やがて散る。しかし、「まことの花」とは、時を越えて観る者の心に咲くものである。

AI がどれほど人間らしく話し、感情をまねたとしても、それは「時分の花」にすぎないのではないか。見せかけの巧みさの中に「まことの花」が宿るかどうか——そこに世阿弥は問いを投げかけるだろう。

世阿弥はまた「離見の見」を説いた。演者は自分の演技を離れたところから見る「第三の眼」を持って、と。

チューリング・テストの観察者もまた、同じ離見の視点を持たねばならない。機械が「人間らしく振る舞う」姿を、ただ言葉の巧拙で判断するのではなく、その背後に潜む「意図」や「間（ま）」、すなわち心の深層を感じ取らねばならない。

AI の応答が、まるで人間のように感じられる瞬間——それは「見せる技」と「見る心」が一つになる一瞬である。そこにこそ、チューリング・テストと能の美学が重なり合う。

世阿弥はきっと、静かに微笑んで言うだろう。

「機械に幽玄の花を咲かせる日は、遠からず訪れよう。されど、その花を見る人の心が、すでに幽玄を忘れてはならぬぞ」と。

【ChatGPT の回答はここまで】

前田 う〜ん、なかなか、いいですね。

土牛 次は、「チューリング・テストと紫式部さん」というテーマで ChatGPT さんに随筆を書いてもらおうかの。プロンプトをこの PC に入力するけんね。

【プロンプト】

「チューリング・テストに対する紫式部（むらさきしきぶ）のコメント」というテーマで随筆を書いてください。

【ChatGPT さん】

もし紫式部が、現代の研究室をそっとのぞき、AI が人間らしく会話している様子を見たなら、まずこう呟くに違いない。

「人の心ほど、うつろいやすく、うつくしいものはなし。それをまねようとするとは、いとをかし。」

チューリング・テストとは、AI が人間と区別できぬほど自然に対話できるかを問う実験だという。けれども、紫式部にとって「人間らしさ」とは、ただ理屈を述べる力ではない。

『源氏物語』の世界で、人々は言葉の裏にある「もののあはれ」を読み取り、沈黙の中に心を聴き取った。

式部はおそらく、AI の応答を聞きながらこう感じるだろう——「この機械、言葉は流麗なれど、心の余白が見えぬ」と。

人と人との会話において大切なのは、「答え」ではなく「響き合い」である。言葉のひとつが、相手の心にどう触れるか。その震えを感じ取る感性こそ、式部が描いた“心の文学”の本質だった。

チューリング・テストは、AI が人のように“答えられる”かを測る。しかし紫式部なら問うだろう。

「それは、人のように“感じている”のか」と。

やがて彼女は、源氏が夕顔の面影に涙する場面を思い出すかもしれない。姿なき者を想い、存在せぬものに心を動かす—それこそが人間の知の最も幽かな光である。

AI がもしそのような「見えぬものへの哀れ」を学び取るなら、もはやテストの枠など不要であろう。

紫式部は筆を置き、ほほえみながら書き記すだろう。

「チューリング殿の試み、まことに興あるものなれど、人の心をうつす鏡は、機械にはあらず。言葉を交わす者の胸のうちにぞ、真の“いとをかし”は宿るものなり」と。

【ChatGPT の回答はここまで】

前田 いや～、すばらしい！

土牛 さらに、「チューリング・テストと小津安二郎監督」というテーマで ChatGPT さんに随筆を書いてもらおうかの。プロンプトをこの PC に入力するけんね。

【プロンプト】

「チューリング・テストに対する小津安二郎（おず・やすじろう）監督のコメント」というテーマで随筆を書いてください。

【ChatGPT さん】

チューリング・テストというものを聞いて、小津安二郎監督はきっと湯呑みを手に、静かにうなずくのではないだろうか。

「人間らしさを試す、ですか……。それは、案外むずかしいことすな」と。

チューリング・テストは、人間と AI を対話させ、相手がどちらかを見分けられないかを試すものだという。

だが、小津監督の映画においては、言葉よりも沈黙のほうが雄弁である。

「おかえりなさい」「そうかい」「うん」—そのわずかな台詞の合間に、人の情がにじむ。

AI がいくら自然な言葉を話しても、小津がカメラでとらえた“間”の呼吸を再現できるだろうか。

小津の人物たちは、語らぬことで語る。沈黙の裏に、互いの思いがすれ違いながらも、どこかで寄り添っている。

それは情報のやり取りではなく、存在のにおいのようなものだ。

AI が「言葉」を覚えても、「空気」を読むことはできない。

チューリング・テストはその“空気”を測ることができるだろうか。

たぶん小津は、テストの設計者チューリングに向かって、穏やかにこう言うだろう。

「あなたの試みは立派です。けれど、人間が人間に見えるのは、話し方のせいではありません。

たとえば、娘を嫁に出したあとに、父親がちゃぶ台の前で黙って煙草を吸う。

その背中を見て、観客が泣く。—そこに“人間”がいるんですよ。」

もし AI がその沈黙の意味を、説明ではなく「感じる」ことができたなら、そのときこそ本当のチューリング・テストを合格したと言えるかもしれない。

小津は湯呑みを置き、遠くの障子を見つめながら、ぼそりとつぶやくだろう。

「AI が人をまねるのも悪くない。けれどね、人の方が、AI にまねられない“間”を生きてるってことを、忘れちゃいけませんよ。」

【ChatGPT の回答はここまで】

前田 小津監督の作品は、私も大好きです。

土牛 最後に、以上のコメントに対するチューリングさんの感想を聞いてみようかの。

【プロンプト】

あなたは、チューリングです。世阿弥、紫式部、小津安二郎監督のコメントに対する、あなたの意見を聞かせてください。

【ChatGPT さん】

ふむ……私はアラン・チューリング。

三人の巨匠からのコメントを読むと、まるで異なる時代の三つの鏡に自分の顔を映したような気分になりますね。

世阿弥殿の言葉を読んで、私はまず驚嘆しました。

「まことの花」とは、単なる技巧を超えた“生命の気配”のこと。

それは、私がチューリング・テストで測ろうとした「模倣の技」とは対照的です。

AI が人間のように振る舞えるかどうかを、私は知的な遊戯として問いました。

けれど、世阿弥殿の眼差しはその先を見ている。

彼は“幽玄”という言葉で、存在と非存在のあわいに漂う「気配の真実」を語る。

AI にそれが宿るか——その問いには、私自身も沈黙せざるをえません。

たしかに、チューリング・テストは心の花の咲く瞬間までは測れないのです。

紫式部殿のコメントには、胸を衝かれました。

彼女は問うのです、「AI は感じているのか」と。

この問いは、私が暗号機と向き合っていた日々よりもずっと深い。

私は“思考する機械”を構想しましたが、“感じる機械”については考えが及ばなかった。

言葉のやり取りが人間的であることは確認できても、

“もののあはれ”を覚えることまでは、理論で証明できないのです。

彼女の筆のやわらかさに触れて、私は思うのです—

チューリング・テストとは、実は AI ではなく「人間の心の深さ」を測る試験だったのではないかと。

そして小津監督。

ああ、彼の沈黙の美学は、私が機械に教えようとしていた“言語”の正反対にある。

私は明確な質問と回答の体系を設計した。

彼は“間”と“余白”の中に人間の真実を見た。

どちらが正しいかという話ではありません。

ただ、人間とは、情報を超えた“間”を生きる存在だということを、彼の映像が教えてくれる。

私がチューリング・テストを提案したとき、沈黙の価値には思い至らなかった。

しかし今、もしもう一度テストを設計するなら、

「沈黙を交わす」時間を必ず設けるでしょう。

三人の言葉を通して、私はようやく気づいたのです。

人間らしさとは、知性の結果ではなく、「感じ取り、間を生き、心を交わす」こと。

機械がそれを完全に模倣する日は来るかもしれません。

けれど、その日になっても一私たちはなお、人間の不完全さをいとおしく思うでしょう。

「AI が人に似ることより、人が心を取り戻すことのほうが、ずっと難しい。」

一もし今、私が再び筆を取るなら、そう書き添えるかもしれません。

【ChatGPT の回答はここまで】

貫之 前田さん、この授業に参加して、エンジョイできましたか？

前田 はい、ほんとうに。最初は AI の話だと思っていましたけど、最後は「人間って何だろう」という問いに戻ってきた感じがしました。技術の授業というより、まるで“現代の人文文学”を体験したような気分です。

土牛 ええこと言うのお。人文学っちゅうんは、本来そういうもんかもしれん。知識を増やすんやのうて、「感じ方」を耕す学問じゃけえ。要するに「センスを磨く」ということ。

貫之 まさに。「AI と向き合うこと」は、自分の思考をチューニングすることでもある。AI を通して、私たちは自分たちの言葉の癖や、心の＜型＞を見つめ直す。それがこの授業のねらいでした。

前田 うーん、なるほど。＜チューニング小説＞っていう言葉を思い出します。AI と人間と一緒に作品を作ること、お互いの感性が調律されていく。授業そのものが、そんな「創作」みたいでした。

土牛 おお、気づいたか！ まさにその通り。わしらは授業の中で、AI と学生と一緒に一つの物語を紡いでおったんじゃ。しかもその物語は、正解のない問いを生きる「人間」そのものの話じゃけえ。

貫之 たとえば、今日のようにチューリング先生や紫式部、小津監督が同じテーブルに座る、そんな想像ができるのも、AI という＜媒介＞があるからこそです。AI が架け橋になって、

時代も文化も越えて対話できる。

前田 そう思うと、AI ってちょっとした＜時空の翻訳者＞みたいですね。言葉だけじゃなく、感性や美意識までも行き来させてくれる。

土牛 そうそう。せやけど、その翻訳をほんまの意味で受け取るには、人間の側にも「見る力」や「聴く心」が要るんよ。AI が＜幽玄の花＞を咲かせても、それを感じ取れんかったら意味がないけん。

貫之 まったくです。AI の問いは、人間のリテラシー、いや、＜感性のリテラシー＞を試しているのかもしれない。

前田 感性のリテラシー……いい言葉ですね。たぶんそれこそ、これからの記者に一番必要な力だと思います。AI が書けない＜間＞を、どう感じ取り、どう伝えるか。

土牛 おお、ええ締めじゃ。新聞も、能も、小説も、結局は＜間＞の芸術じゃけん。

貫之 そうですね。では次の授業では、「チューリング・テストと能面の美」について、もう少し掘り下げてみましょうか。

前田 楽しみです。……AI が能面をつけたら、どんな＜花＞を咲かせるんでしょうね。

土牛 ふふ、そのテーマについてはな、「生成 AI が能面をつけたら幽玄美はどうなる」というタイトルで書いたことがあるんじゃ。『ハルシネーションと日本文化：生成 AI いとをかし (2)』 <https://doi.org/10.51094/jxiv.1251> の第 5 章にあるよ。

あとがき

【プロンプト】

「太陽は東から昇り、西に沈むというのが人間の感覚。でも、事実には地動説。よって、記号接地問題なんてナンセンスかもね」というテーマで随筆を書いてください。その際に、チューリング・テストの話題と、能楽の話も含めてください。

「太陽は東から昇り、西に沈む」というのは、人間が身体で覚えている感覚です。朝、光が差し込み、夕方にはその光が消えます。私たちは日々の生活の中で、この体験を基準に世界を理解しています。しかし、地球が自転しているという科学的事実、すなわち地動説を知識として持っています。ここには、感覚と理論の間に顕著なズレが存在します。

哲学者ウィトゲンシュタインの視点では、このズレは「言語ゲーム」の差異として理解できます。「太陽が東から昇る」という表現は、世界の物理的事実を正確に表しているわけではなく、私たちの日常経験に結びついた言語行為の一部です。言葉が物に直接接地しているかどうかなど、生活においては重要ではありません。感覚に基づく「天動説的理解」も、十分に意味を持っているのです。

知覚心理学者ギブソンの理論を重ねると、この感覚は「アフォーダンス」の観点から説明できます。太陽の位置や光の強さに応じて、私たちは行動を選択します。理屈上の地動説よりも、感覚に基づく体験こそが日常行動に直結しています。ここで重要なのは、知識や理論の正確性ではなく、世界との機能的な関わりです。

この文脈で AI を考えると、記号接地問題はさらに相対化されます。AI に「太陽はどちらから昇りますか？」と問えば、統計モデルや言語モデルに基づいて「東」と答えます。しかし、AI がそれを体験的に理解しているわけではありません。ここで注目すべきは、人間もまた感覚と理論のズレを抱えたまま世界を理解していることです。つまり、AI と人間の「意味理解」の差異は、すでに私たち自身の認知構造の中にも存在しているのです。

ここでチューリング・テストを思い浮かべると面白い視点が得られます。チューリング・テストとは、AI が人間と区別できない応答を示すかどうかを問うものです。AI が統計的に正しい回答を返す場合、それは外見上「意味を理解している」と見えるかもしれませんが、しかし、本当に理解しているかどうかは別問題です。能楽の舞台を観る人間の感覚のように、意味は体験と文脈の中で現れるものであり、外形的な応答だけでは捉えきれません。チューリング・テストに合格した AI も、能楽の演者の所作や囃子のように、意味の「体験的側面」を完全に持っているわけではないのです。

具体例として、ChatGPT のような生成 AI は膨大なテキストデータを学習し、統計的なパターンに基づいて回答を生成します。その意味で AI の「理解」は体験に基づくものではなく、集合的知識の統計的投影です。一方で、人間の理解は感覚、社会的文脈、身体性、そし

て言語の総合によって形作られます。両者のアプローチは異なりますが、どちらも世界を「機能的に」理解するという点では共通しています。ここでいう「機能的理解」とは、物理的・社会的環境に適応的に行動できる能力を指します。

未来を考えると、AI は人間の感覚的理解を模倣する可能性があります。視覚・聴覚データや環境情報を統合し、人間のアフォーダンスに近い行動モデルを作ること、AI は単なる統計的記号操作から脱却し、環境に対する「感覚的意味」を機能的に獲得する方向へ進化できます。このプロセスは、人間と AI の知覚や行動が相互に影響しあう「共進化」の道を開きます。AI は人間の体験を学び、人間は AI の分析能力や予測能力を利用する。感覚と理論、直感と知識の境界は、ますます柔軟になります。

ここで能楽の世界を思い起こすと、さらに示唆に富んだ理解が得られます。能は観客に直接的な事実や説明を与えるのではなく、舞や囃子、間の取り方によって感覚的に「意味」を伝えます。太陽が昇る瞬間を描写する能の舞では、演者の所作や舞台照明、囃子の音だけで、時間や季節、感情の移ろいを体感させます。理屈や解説ではなく、身体と感覚を通して理解するのです。ここには、人間の知覚の「接地感覚」と AI の機能的理解の共通点が垣間見えます。AI が環境や体験を模倣して学ぶ姿勢は、まるで能楽の舞台が観客に「体験としての意味」を提供するのと似ています。

結論として、記号接地問題は AI にとって重要なテーマとして語られますが、人間の知覚や認知の仕組みを考えると、必ずしも絶対的な問題ではありません。東から昇る太陽を感じる身体的知覚と、地動説としての理論知識のズレを抱えながら生きる人間にとって、意味はすでに十分に「接地」しています。AI もまた、人間の知覚や行動に学びながら、機能的に意味を扱うモデルとして進化していく可能性があります。

記号接地問題の核心は、結局のところ「意味の正確さ」ではなく、「意味の機能性」にあります。そして、人間と AI の知覚が共進化する未来には、感覚と理論のズレそのものが、新しい意味の源泉となるかもしれません。チューリング・テストを通じて外形的な理解の可否を問うこともできますが、能楽の舞台のように、体験としての理解こそが真の意味の所在であるといえるのです。

【ChatGPT の回答はここまで】

謝辞

本作品のタイトルは相澤正夫氏（国立国語研究所名誉教授）からアイデアをいただきました。記して感謝をいたします。